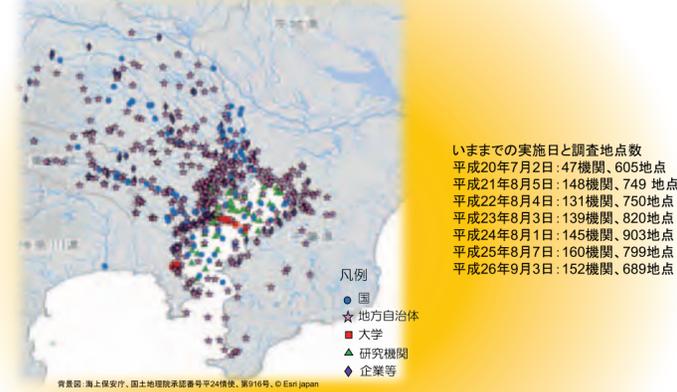


東京湾環境マップ

～みんなで見守る東京湾の変化～



いままでの実施日と調査地点数
 平成20年7月2日: 47機関、605地点
 平成21年8月5日: 148機関、749地点
 平成22年8月4日: 131機関、750地点
 平成23年8月3日: 139機関、820地点
 平成24年8月1日: 145機関、903地点
 平成25年8月7日: 160機関、799地点
 平成26年9月3日: 152機関、689地点

本マップ・東京湾環境一斉調査について

東京湾環境一斉調査（旧称:東京湾水質一斉調査）は、平成20年度から、国・自治体・研究機関・企業・市民団体などが連携をはかり、海域及び河川の水質等を一斉に調査するとともに、環境啓発活動等のイベントを実施するなど多様な主体が連携、協働する総合的な取り組みとして実施されております。

平成26年度の東京湾環境一斉調査では、8月の調査予定日が荒天のため、例年より1カ月遅い9月に調査が実施されました。例年と同じく内湾での夏季の一般的な傾向である水温、塩分の成層の発達、湾奥部の底層に広がる貧酸素水塊や、調査直前の降雨の影響なども観測されました。

本マップは、東京湾再生推進会議モニタリング分科会と東京湾再生官民連携フォーラム東京湾環境モニタリングの推進プロジェクトチームの協働により編集・発行されております。本マップは、上記機関及び東京湾環境一斉調査に参加いただいた機関との共同の成果であります。

本年度は「生き物をはじめとする様々な調査の展開」「市民レベルから行政まで多様な取組」などを中心にとりまとめました。ご活用いただければ幸いです。

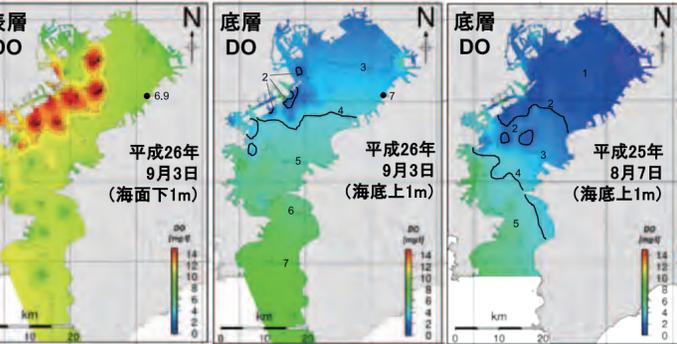
平成27年3月 Vol.9

東京湾再生推進会議モニタリング分科会
 九都県市首脳会議環境問題対策委員会水質改善専門部会
 東京湾岸自治体環境保全会議

東京湾再生官民連携フォーラム東京湾環境モニタリングの推進プロジェクトチーム

今回の調査のまとめ

平成26年度の環境一斉調査は、当初8月6日を調査基準日としていましたが、天候不良のため9月3日に延期して実施しました。今回の調査結果においても、底層に溶けている酸素(DO)の少ない水(貧酸素水塊)が認められました。今回の調査結果では、強く貧酸素化していた海域(DO<2mg/L)の面積は、平成25年8月と比較して狭い範囲にとどまっています。これは調査基準日前に卓越していた北よりの風によって、湾奥沿岸で湧昇するなどして貧酸素水塊の一部が消滅したためと考えられます。



※●は排水口、出水口等の近傍データで、コンター作図から除いています。

平成26年度調査基準日(9月3日)における東京湾における貧酸素水塊(DO<4mg/L)は、横浜沖から袖ヶ浦沖までの湾奥の底層に分布していました。

平成26年度の底層のDOの調査結果では、強く貧酸素化していた海域(DO<2mg/L濃青色の部分)の面積は、平成25年度8月7日と比較して狭い範囲にとどまっています。これは、実施基準日前に卓越していた北よりの風によって鉛直循環が形成され、底層水が湾奥沿岸へ運ばれた結果、表層へ湧昇するなどして貧酸素水塊の一部が消滅したためと考えられます。この北よりの風に伴い、千葉県の一部で青潮の発生が確認されています。

上層のDOをみると、一部で過飽和状態となっている海域がありました。これは植物プランクトンによる光合成が活発に行われていたためであると考えられます。

本マップについてのお問い合わせ

編集事務局: 海上保安庁海洋情報部環境調査課 難波江 靖・森岡 裕詞
 〒135-0064 東京都江東区青海2-5-18 TEL.03-5500-7153

協働事務局: 東京湾再生官民連携フォーラム 東京湾環境モニタリングの推進プロジェクトチーム
 横浜国立大学・古川 恵太 (PT 長) TEL.045-339-3067 Email: keitaf@ynu.ac.jp

発行: 国土技術政策総合研究所 沿岸海洋・防災研究部海洋環境研究室
 〒239-0826 神奈川県横浜市中区長瀬3-1-1

(1) 東京湾岸自治体環境保全会議での取り組み

東京湾岸自治体環境保全会議では、東京湾の水質浄化や環境保全を図るために、湾岸に面する26自治体で広域的な対策・啓発について協議し、連帯的・統一的な環境行政を推進することを目的として、様々な活動を行っています。(東京湾岸自治体環境保全会議)

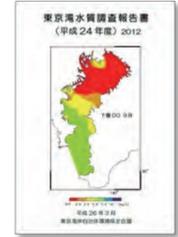
当会議では、主な活動として、啓発イベントの実施及び参加、研修会の開催、ホームページによる情報発信、東京湾水質調査報告書の作成、東京湾岸マップの作成・配布等を行っています。

平成26年度は、啓発イベントとして東京湾大感謝祭に会議のブースを出展しました。来場した方に東京湾各地の水の水質簡易測定や水中のプランクトン観察を体験していただいたり、赤潮、青潮についてのパネル展示を行う等、東京湾の水環境について啓発活動を行いました。

また、職員が東京湾に関する知見を養うことを目的に、他の団体や自治体が開催する干潟生物調査や講演会へ当会議の研修会として参加しました。



研修会の実施 (多摩川河口干潟干潟生物調査)



東京湾水質調査報告書 (ホームページに掲載)



啓発イベントの実施 (東京湾大感謝祭)

住民の皆様へ東京湾岸へ出かけたり東京湾の水質調査へ関心を持つきっかけとして利用していただくことを目的に、湾岸のスポットやイベント等をまとめた東京湾岸マップを作成し、各自治体が開催する関連イベント等において配布しています。

また、東京湾の水質の経年変化、季節変化を取りまとめた報告書を毎年作成し、水質改善に関する施策の効果判定等に利用しています。

上記報告書のデータや、東京湾に係る様々なイベントの開催予定情報は、ホームページからご覧いただけます。

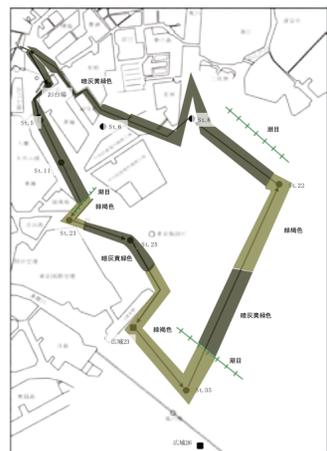
(<http://www.tokyowangan.jp/top.html>)



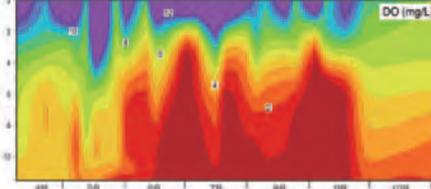
東京湾岸マップ

(2) 平成26年の出水時における東京都内湾の赤潮

都内湾では、調査2日前及び4日前の降雨により塩分の低い状況であったにもかかわらず、夏の再来を示す珪藻類のタラシオシラ属やスケルトネマ属、及び初夏に多く出現するラフド藻のヘテロシグマ アカシオなどによる赤潮が拡がっていました。これらの植物プランクトンが死んで海底に堆積し、分解されることで貧酸素水塊を増大させますが、夏期に長く続く赤潮によって海底の貧酸素水塊が厚い層になり、生物に有害な硫化水素発生元になっている可能性が示唆されました。



中央防波堤内側 St.6 でのクロロフィル濃度(50mg/m³以上で赤潮)と海水の鉛直方向の溶解酸素濃度の推移をみると、5月前半の赤潮発生直後に死んだプランクトンの分解に酸素が消費されて貧酸素水塊が出現する様子が見られ、その後、連続して発生した赤潮が貧酸素層を厚くしている様子が伺えました。また、9月4日には同地点で硫化水素イオンが0.4mg/L検出され、生物に有害な硫化水素の発生も懸念されました。



(3) 市民による東京湾一斉調査への参加

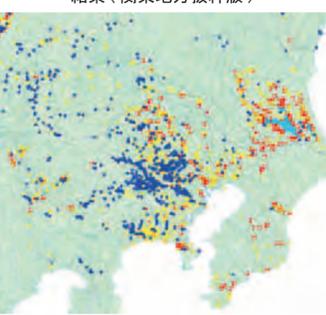
昭和60年代から、多摩川・荒川の流域や霞ヶ浦・琵琶湖の流域など全国各地で行われており、平成16年には「身近な水環境の全国一斉調査」がスタートし、統一日に統一の手法、器材を用いて身近な水辺の水質調査を実施しています。東京湾で官民連携の動きがあると知り、川と海をつなげる調査になればよいと思います(今年度より参加しました)。(佐山公一・みずとみどり研究会)

＜身近な水環境の全国一斉調査とは＞

平成16年より市民と行政が連携をして、全国の水辺などを統一のマニュアルを用いて毎年6月の統一日に一斉に調査を行っています。基本調査項目は気温、水温、CODです。CODは事務局から無償で配布するバックテストで試水を3回測定します。3回測定することによりばらつきや異常値を排除し、精度確保に努めます。

毎年、およそ5500地点のCOD結果は3段階に色分けし、全国マップにプロットします。一例として今年の関東地方を拡大した水質マップを右に示します。また、約半年後の12月には結果概要パンフレットとして得られたデータや参加者のコメントや写真など全国の状況をまとめ、参加者へ返却するとともに各方面への広報用資料として活用しています。また、ホームページでも公表して多くの方がデータを活用できるようになっており、各地で独自のマップや資料作成のデータとなっています。「身近な水」で検索すると詳しい情報が見られます)

第11回身近な水環境の全国一斉調査結果(関東地方抜粋版)



＜東京湾一斉調査への参加＞

私は今年の東京湾一斉調査日の9月3日、「身近な水環境の全国一斉調査」の手法を用いて、バックテストによりCODを3回測定を行い、同時に電気伝導度と透視度も測定しました。調査河川は東京湾に注ぎこむ江戸川、荒川、多摩川をそれぞれ中、下流域を調べ、差を見ました。



河川の調査の結果

地点番号	調査地点名	調査日	時間	気温	水温	電気伝導度	COD	EC
1	江戸川 右岸 笠笠の渡し	2014-09-03	09:00-09:00	23	23.6	0.4	4	20.4
2	江戸川 左岸 舟形 船橋橋上	2014-09-03	10:00-09:00	23	23.8	0.15	3	4.89
3	荒川 左岸 西新井橋 50m上流	2014-09-03	07:30-09:00	23	22.5	0.17	3	18.5
4	荒川 右岸 西新井橋 下	2014-09-03	11:00-09:00	23.5	23	0.27	3	39.9
5	多摩川 左岸 府中市東土の森付近	2014-09-03	14:25-09:00	27	24.7	1.1	4	20.8
6	多摩川 右岸 宮前橋 150m上流	2014-09-03	15:40-09:00	23	23.2	0.17	3	21.4

※地点名の多摩川大野橋の0は毎時観測にて調査。

(4) 東京湾ミニシンポジウム報告

東京湾海洋環境研究会は、大学・研究機関に勤める科学者集団として、東京湾再生の学術的な情報基盤を強化するために、東京湾大感謝祭2014にてミニシンポジウム「東京湾を再生するためにどのような研究が必要か？」を開催しました。(野村英明・東京湾海洋アライアンス(大気海洋研))

- ### ＜発表内容＞
- 市民調査から見てきた東京湾のマハゼ 古川恵太(江戸川ハゼ復活プロジェクト、横浜国立大): マハゼの深刻な資源量の減少を受け、市民参加型調査も活用し、生息状況を明らかにするとともに、今後の対策について提案した。
 - 羽田周辺水域を中心とした生元素循環と貧酸素水塊の相互作用 小川浩史(東大大気海洋研): 東京湾湾奥部における貧酸素水塊の形成に関わる生元素循環メカニズムおよび、貧酸素化が生元素循環に与えるフィードバック機構を紹介し、貧酸素化の抑制策にも言及した。
 - 多摩川河口周辺および沖合での底質・流動泥の挙動について 中川康之(港湾空港技術研究所、有路隆(関東地方整備局)): 長期モニタリングの結果から、多摩川河口域周辺水域の底質環境の時間変動の特徴を報告した。大規模な河川出水や東京湾内湾の高波による沖合部での流動泥の挙動や、堆積物特性と底生生物相の関係などが見えてきた。
 - アサリの初期生態から見た貧酸素の影響 鳥羽光晴(千葉県水産総合研究センター): 春から秋まで出現するアサリの浮游幼生は湾全域に分布するが、夏季は底層に貧酸素水塊がほぼ常在する。貧酸素の影響は生活史全体で評価する必要がある。
 - 干潟ベントス多様性回復における干潟内ならびに局所的干潟間環境の多様性の保全再生の重要性 柚原剛(静岡県立下田高校)・風呂田利夫(東邦大): 干潟生物の多様性は局所的な環境(干潟目標高、底質、塩分、植生など)の多様性による。今回は湾内に散在する人工的な閉鎖環境に二次的に形成された干潟のベントス群集を調べて、東京湾における干潟生物多様性の保全回復策を提案した。

＜総合討論: まとめ＞

- 干潟の認知度上昇の次は、「背背湿地まで含めた『連続的景観』の再生」
- 調査の継続
- 研究者情報、個人個人の研究テーマをデータベース化
- 分野横断的なグループで調査研究を行い、同じデータを見ながら議論する。
- シンポジウムの記録を含め、あらゆる研究情報の自由な閲覧
- 東京湾の環境を再生を通して、持続可能な国土利用をめざす活動の継続
- 研究者やアウトリーチ活動の行える人材の育成と雇用の増大
- 東京湾とその流域圏を専門に研究する機関の創設

東京湾海洋環境研究会の活動

平成8年11月、東京湾の水域環境に関する複数の学会で組織した東京湾海洋環境シンポジウム実行委員会(後に東京湾海洋環境研究委員会)が第1回公開シンポジウムを共催し、10年後をめぐって社会に向けた東京湾の環境再生を提言することを目標に活動を開始しました。第2回では東京湾流域の統合的管理の必要性和中核的研究期間の創設を提唱し、シンポジウムを継続してきました。

最終的には17学会団体の参加をえて、これまでに例のない規模の提言を取りまとめました。それが平成23年に発刊した「東京湾: 人と自然のかかわりの再生」(恒星社厚生閣)です。また、その概要を冊子「22世紀の東京湾流域圏~人と自然のかかわりの再生による、持続可能な社会、美しい国土の継承~」(左)として作成し、各所に配付しました。委員会が目標を達成して解散しましたが、その時のメンバーがボランティアな科学者集団「東京湾海洋環境研究会」と名前を変え、東京湾再生の知恵袋として、アカデミックな立場で活動を続けています。

提言概要冊子は日本海洋学会のホームページからダウンロード出来ます
http://kaioyo-gakkai.jp/jos/wp-content/uploads/2013/11/2012Aoiumi_teian.pdf

(5) 東京湾再生のための指標

平成25年5月に東京湾再生のための行動計画(第二期)が新たに策定されました。行動計画(第一期)の反省から、行動計画(第二期)の指標群は、多様な主体の活動を更に促進でき、あらゆる興味を東京湾に惹きつけられる指標となることが求められました。そこで、東京湾再生官民連携フォーラムは、『東京湾再生のための行動計画』の指標検討PT(指標PT)を立ち上げ、行動計画(第二期)に相応しい指標の議論を行い、次のような指標群を提案しました。(東京湾再生官民連携フォーラム「東京湾再生のための行動計画」の指標検討PT)

全体目標の要旨	番号	指標	目標値(短期:行動計画(第二期)期間中)	目標値(長期:20~50年)
(A)快適に水遊びができる	A-1	透明度	夏季において1.5m以上	夏季において2.5m以上
	A-2	COD	改善傾向を示す	年間平均値として2mg/L
	A-3	食肉改善対策によって削減された汚濁負荷	改善傾向を示す	改善傾向を示す
	A-4	農薬対策	減少傾向を示す	湾内全域において海水浴場の水質レベル
	A-5	ゴミの回収	行政:回収量が現状(105年度)と同量 市民:回収量が増加傾向を示す	行政:回収量が現状(105年度)より減少 市民:回収量が増加傾向を示す
	A-6	水質改善に向けた水質調査の回数	増加傾向を示す	活動の継続
	A-7	赤潮発生回数	減少傾向を示す	年間発生回数5回以下
	A-8	水質イベント・環境学習イベントの参加者数	増加傾向を示す	活動の継続
	A-9	海岸公園等の施設利用者数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
(B)「江戸川」をはじめ多くの生物が生息する	B-1	水生生物の指標(魚類・底層動物の生数)	現状(102年度)の生物生息量 約4,430尾/4箇所の地点 砂浜・浅瀬・塩田・新設な生物生息場 約35尾/7箇所以上の発生	異なる再生
	B-2	藻場の面積	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	B-3	生物共生型浄化槽の延長	現状(102年度)より1.2倍以上増加	増加傾向を示す
	B-4	CO ₂ 濃度(底層)	削減傾向を示す	夏季の底層で2mg/L以上の地点数の増加 削減率は150年後(仮)には4mg/L以上 検出されない
	B-5	硫化水素濃度(底層)	検出される場所の減少	検出されない
再生目標の達成度を評価する指標	B-6	底生生物の生息環境	環境改善が向上した傾向を示す	内湾で1種増減率以上 外湾で1種増減率以上
	B-7	江戸川の地味・色・臭いの悪化(悪臭)の発生回数	増加傾向を示す	活動の継続
	B-8	青潮	大規模発生が稀小傾向を示す	発生しない
	B-9	再漁	増加傾向を示す	増加傾向を示す
(C)観しやす(美しい)	C-1	海辺に注ぎこむ水際線延長	現状(102年度)より1.4倍以上増加 現状(102年度)より1.4倍以上増加	現状(102年度)より1.4倍以上増加 現状(102年度)より1.4倍以上増加
	C-2	海が見える視点数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	C-3	水辺イベントの開催回数	増加傾向を示す	活動の継続
(D)自然観にふさわしい	D-1	水質改善に向けた水質調査の回数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	D-2	下水処理施設の放流水質	放流水質(COD、全窒素、全リン)が現状(105年度)より削減傾向を示す	全ての処理施設が「東京湾の環境基準達成に向けて」削減傾向を示す
	D-3	フォーラム会員数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	D-4	多様な主体による環境の保全(再生)の取り組みの件数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	D-5	科学論文・報告書の数	増加傾向を示す	増加傾向を示す
	D-6	人々のための流入負荷	減少傾向を示す	減少傾向を示す
	D-7	東京湾の環境に對して取り組む活動の件数	増加傾向を示す	増加傾向を示す

(6) 新たな調査の展望 ＜透明度調査＞

東京湾環境一斉調査では、平成23年度から透明度を推奨項目として設定しています。平成22年発表された閉鎖性海域中長期ビジョン(環境省)においても、生物の生息等を評価するために透明度や溶解酸素量を導入するという方向性が示されています。こうした透明度調査方法、環境指標としての特性、モニタリングの実践事例を紹介しました。(東京湾再生官民連携フォーラム 東京湾再生のためのモニタリング推進PT)

＜透明度調査の方法＞

透明度は、透明度板(セッキー円盤)と呼ばれる直径30cmの白色円盤を水中に沈め、上から見える境界の深さを図ることによって簡易に測定できます。

調査時には、水中への転落などに注意する他、降雨後など急速に水質が変化する場合があることに留意する必要があります。

＜透明度と湾内環境の関係＞

湾内流入が適正で藻類の繁殖が制限されれば、透明度が上昇し、DOの増加、生物環境の改善を通して、健康な湾が形成されます。

一方、負荷が過剰で藻類が急激に繁殖すれば、透明度が減少するとともに栄養塩の枯渇による藻類の枯死、分解が進み、DOの減少、生物影響を経て湾内環境が悪化する可能性があります。

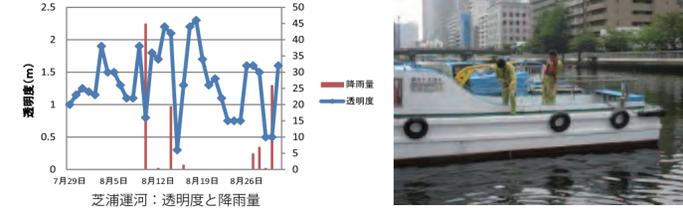
Howes, Williams & Rasmussen(1999)より

＜実践事例: 海員による透明度連日測定＞

東京シブサービス㈱

東京都より貸与された透明度板を用い、期間中毎日、ほぼ同時に、同社の船溜まりにて、透明度、水色、COD(バックテスト法)を測定しました。測定は、なるべく運河の流れの中心に近い箇所で行いました。実施したのは、同社の船員です。その日により担当が変わりました。結果、透明度は0.3mから2.3mの間を推移し、降雨の後は透明度が下がる傾向が明らかになりました。また、測定者による違いは認められませんでした。

透明度はわかりやすい項目であり、一般人でも容易に測定できることがわかりました。機器が大きく取扱いづらい欠点があるものの、沖合と異なり、運河部など静かな水面で行うならば、実施しやすい調査と感じました。



東京湾環境一斉調査 貧酸素水塊マップ

東京湾環境一斉調査

平成26年度の東京湾における流域及び海の環境一斉調査（東京湾環境一斉調査）は、平成26年（2014年）9月3日（水）を基準日（※）とし、平成26年7月30日から9月24日の間に実施されました。海域・河川での環境調査、生物調査データ収集及び環境啓発活動等のイベントの実施に参加した機関は152機関で、環境調査の実施地点数は689地点でした。

（※）当初は8月6日（水）を基準日としていましたが、悪天候のため準備日に延期しました。

【調査概要・速報図の入手】
 ・東京湾再生推進会議「東京湾環境一斉調査」より
http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/TB_Renaissance/
 ・各機関による調査データ、調査結果の入手
 ・東京湾環境情報センター、東京湾WEB-GISの「実データダウンロード」より



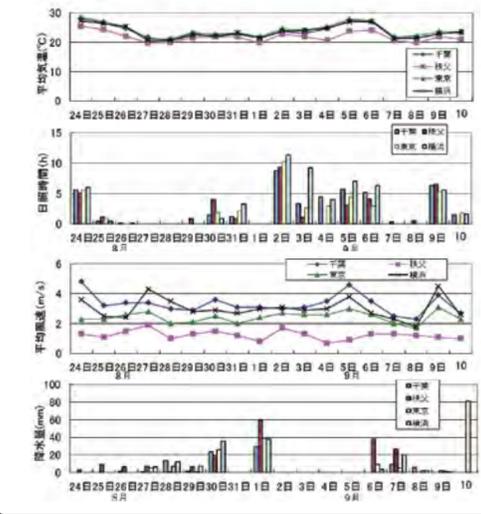
環境調査	【調査項目】 海域：溶存酸素量(DO)、水温、塩分 陸域(河川等)：化学的酸素要求量(COD)、水温、流量
生物調査データ収集	【調査対象データ】 概ね平成26年5月から10月にかけて実施
環境啓発活動等のイベントの実施	【活動内容】 海域または陸域(河川等)の水質改善に関する普及啓発を含め、活動の規模や参加者の対象に制限は設けず

溶存酸素量（DO：ディーオー）：1リットルの水中に溶けている酸素が何ミリグラムあるかで示される指標（単位：mg/L）。20度1気圧の条件下で、1リットルの水に約9mgの酸素が溶けることができます。DOが4.3mg/Lより少ないと生物の生息に支障が出ると言われております。

化学的酸素要求量（COD：シーオーディー）：1リットルの水中の有機物を化学的に分解するのに何ミリグラムの酸素が必要を示した値（単位：mg/L）。有機物の量を推計するための指標であり、水質基準のA類型（水浴や自然環境保全、水産利用に適する水質）の場合CODが2mg/L以下であることが求められています。

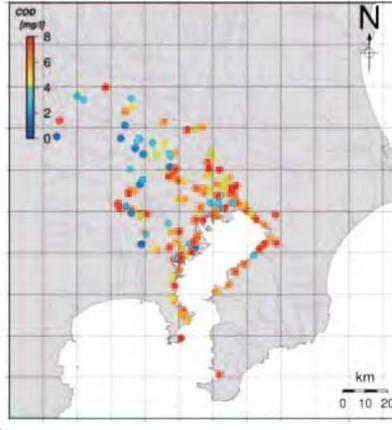
調査時の気象・海象（千葉、秩父、東京、横浜）

今年度は悪天候のため調査基準日が9月に順延されたため、気温は例年よりも低い値で推移しました。降雨は、8月24日～9月1日まで断続的に認められています。9月1日にはまとまった降雨があり、秩父で60mm/日に迫る日降水量が観測されています。風については、調査基準日前後に千葉及び横浜で平均風速約3m/sでした。

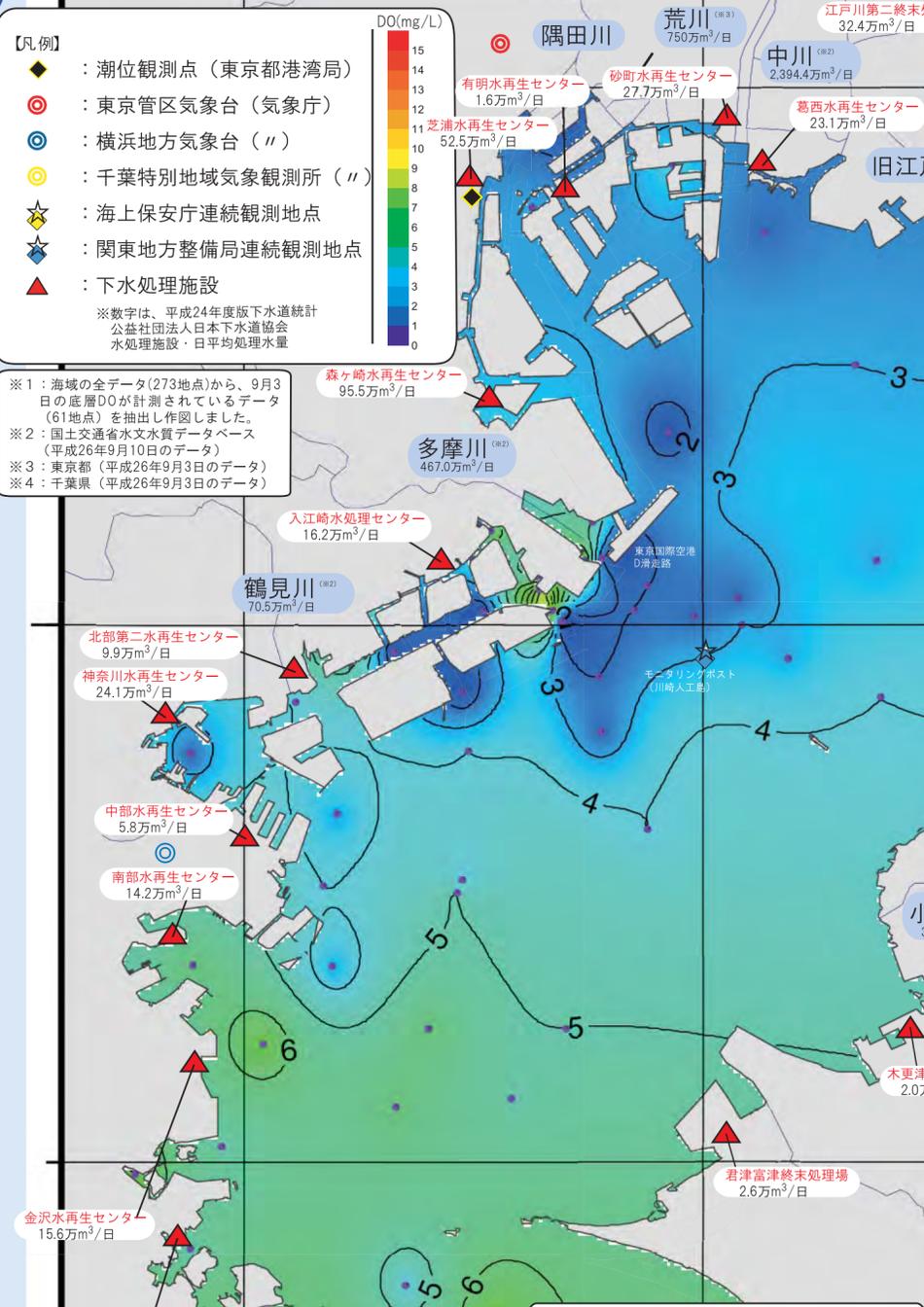


陸域データ

陸域のCOD分布を空間的に表示しました（下図）。河川ごとに違いがあることがわかります。陸域のCOD分布を河川毎に整理しました（右図）。CODが流下と共に高くなっていることがわかります。



底層（海底面上1m^(※1)）の溶存酸素(DO)濃度の水平分布と一斉調査実施状況



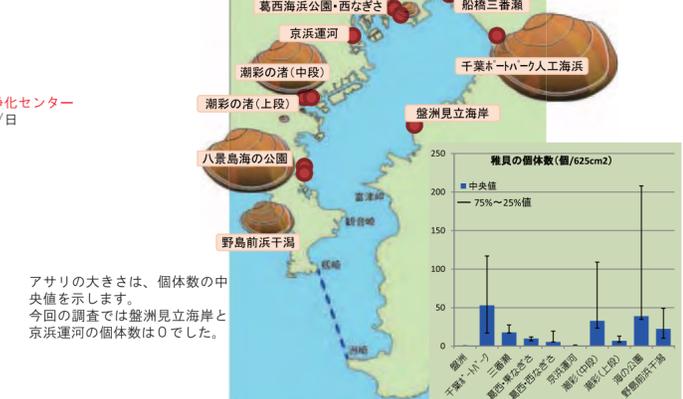
お台場海浜公園の水中生物の記録



江戸前アサリ「わくわく」調査

アサリは子供の時はプランクトン幼生として東京湾を漂って生活しています。この間にあちらこちらに流されますが、2週間程度で貝の形に変化し、干潟での生活を始めます。アサリの子供が流れ着いた干潟でアサリの稚貝が「わく」こととなります。干潟にたどりついた約0.2mmのアサリの稚貝は、1年で25mmまで大きくなることもあります。20mmになると親貝として春と秋に産卵をするようになります。

調査では 25×25cmの調査枠内において、10mm以下の稚貝個体数を計測しました。平成25年4月1日から9月30日までの調査期間に、10地点、71枚の調査シートが集まりました。地点ごとの稚貝個体数の中央値は、千葉ホトハク人工海浜、八景島の公園、潮影の渚（中段）で多く、それぞれ53個、39個、33個でした。



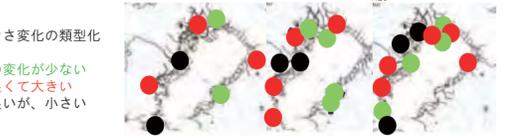
マハゼの棲み処（すみか）調査

マハゼは、冬に6-8mの砂泥質の海底に産卵生息孔を掘って産卵し、春にふ化した稚魚が汽水域を遊り浅瀬に集まり、初夏から秋にかけて河口や運河部に下って来ます。この時期のマハゼは8-12cm程度で、岸からのべ年で簡単に釣れることから、当歳魚をデキハゼと呼んで、人気の釣り物となっています。晩秋には深場に移動し、落ちハゼとなり、大きいものは20cmを超えます。この時期のハゼの船釣りが人気です。

	H24	H25	H26
釣果 (1人1時間区)	20.1	12.0	21.4
7月全長(mm)	91	88	86
8月全長(mm)	101	99	91
9月全長(mm)	120	107	100

マハゼの棲み処調査

東京湾で釣れたマハゼの全長データをファックスで報告していただくという、市民参加型の調査を平成24年から実施しています。本年度は、例年に比べて、やや小さい傾向が認められました。また、冬の産卵群だけでなく、初夏の産卵群の存在と、その群が東京湾のマハゼ資源量に寄与していることを示唆するデータが得られつつあります。

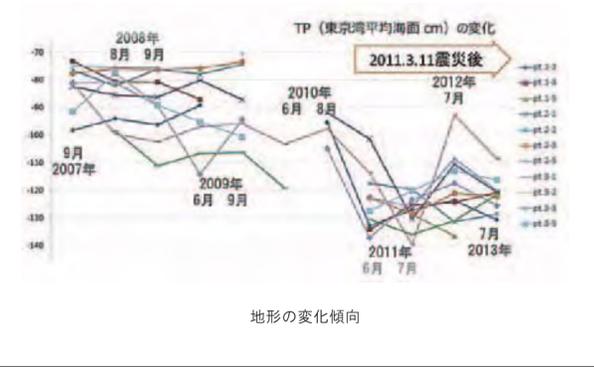


震災前後の三番瀬浦安地先のモニタリング

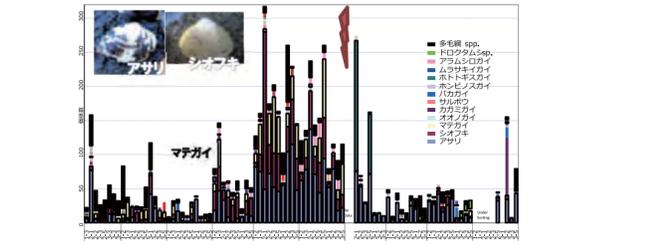
三番瀬は、浦安市、市川市、船橋市、習志野市の東京湾沿いに広がる約1,800ヘクタールの干潟・浅海域（浅い海）です。このうち、浦安市日の出地先の干出域（通称「ひのでひがた」）において、震災以前に平成21年（2009年）まで実施された三番瀬自然環境合同調査（千葉県）に引き続き、市民による震災後のモニタリングを実施しています。（浦安自然まるごと探検隊 著「新浦安から伝える東京湾の海辺「三番瀬」」参照）



モニタリングの結果、震災後に干出域の水深が40cm前後低下したものの、平成26年（2014年）時点で場所によって10cm近くが戻っていることがわかりました。



震災後の調査ではシオフキやマテガイが殆どみられなかった一方、3cm以上の大型のアサリの割合が増加したことが観察されています。



平成26年（2014年）には様々な種類の貝類の稚貝の加入や「ひのでひがた」よりも湾中央方向の沖に浅場が発達した様子が見られました。一方で、震災前後と比較して大型のアサリがあまりみられなくなっています。現地には護岸前立ち入り禁止の看板が掲示されています。

